

地元の魅力 原市場の地名 第1回

居住の地区名は房ヶ谷戸という、どのような意味があるのか興味を持ち語源から調べてみました。

大字原市場の房ヶ谷戸に西光寺跡地には市指定文化財「西光寺板石塔婆」がある、中世(鎌倉～戦国時代)正元1260年～1312年に造られた石塔の一種で、仏を供養するという卒塔婆としての性格をもっている。

【房(棒)ヶ谷戸】 飯能市史資料編(地名・姓氏)より

肥沢の南にある川沿いの谷戸。房は西光寺の房(坊)があつたのでいう。棒ヶ谷戸と当て字で書かれることもある。赤沢の金錫寺を中心として房のつく字があるが、これはフサと読まれている。

大房・東大房、西大房は金錫寺周辺をいい、金錫寺が大房にあり、大房(房)をいっているのは確かで、房ヶ谷戸に対しふさと読ませている。

房ヶ谷戸の西、金山地区があり金山は鍛冶屋の神様、金山彦神のことでもある。詳細については地元の魅力「タタラ場の痕跡」シリーズ参照願います。

原市場地区には谷戸(やと、がいと)がつく地名が多数あり拾い出す。

- ・助ヶ谷戸(スケガイト)中居の西。原がうちつづき、民家が集まっている。
助ヶ谷戸や割間(割地)などを助け合って耕した、農村の生活共同体を表わしているように思える。
- ・大物谷戸(オオモノガヤト)長石須の西。辞典に「大物見：多くの兵を率いて斥候にでること、またその人」とある。大物見の場所が山中にあつたのか。
- ・向ヶ谷戸(ムコウガヤト)峯子の西。峯に円通寺があったという。その向か。山を背にした南向きの平地。
- ・柚木谷戸(ユキガヤト、ユズノキガヤト、ユノキガヤト)向ヶ谷戸の西北。
- ・油ヶ谷戸(アブラガヤト、アブラガイト)中藤下郷大両寺の西。燈明用の油菜や胡麻を植えたのか、あるいは近くに寺や社が多いから燈明料として、その寺社領にあてたかなどと思う。
- ・西ヶ谷戸(ニシガヤト)中島に対する西ヶ谷であろう。
- ・柄杓谷戸(エシャクガヤト、シャクガヤト)井戸入りの北。東南に開けた川沿いで民家も多い。水を汲む「ヒシャク」の谷戸いうのであろうか、そのような地形と見えない。ヒシャクで手軽に水が汲めるという日常生活の姿から地名が生まれたのであろう。
- ・雲谷戸(クモガイト)申渡の北。高い場所に茅葺きの大きな家がある。

ここまで昇れば日ざしもよい。近くに神明社もある。

- ・**栃屋谷(トチヤガヤ)**古玉の東南、栃の木がある谷戸のことであろう。
山村では救荒食としても栃の実は重要だったから地名にもよく見られる。御靈神社から、栃屋谷川をさかのぼって行くと左右に点々と並び、途中を左に入ると栃屋谷である。

原市場地区だけでもこれだけの谷戸がある。

山間地域(吾野、東吾野、南高麗、名栗)飯能地区、清明地区、加治地区を含めれば大変な数の谷戸名称がありそうだ。

谷戸(やと、がいと)について辞典より抜粋。

参考：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

谷戸(やと、がいと)とは、丘陵地が浸食されて形成された谷状の地形である。また、そのような地形を利用した農業とそれに付随する生態系を指すこともある。谷(や、やと)、谷津(やつ)、谷地(やち)、谷那(やな)などとも呼ばれ、主に日本の関東地方および東北地方の丘陵地で多く見られる。

地形：多摩丘陵、三浦丘陵、狭山丘陵、房総丘陵、武藏野台地、下総台地といった関東の丘陵地、台地の縁辺部が長い時間をかけて浸食され形成された谷状の地形は、谷戸、谷津、谷地などと呼ばれている。

これらの表記および読みは地域により分布に差が見られ、同様の地形を表す際にも、千葉県などでは「谷津」(やつ)を、神奈川県および東京都多摩地域では「谷戸」(やと)、「谷」(やと)を、東北地方では「谷地」(やち)を使っている場合が多い。

これらの経緯については史料が少なく詳細は分かっていないが、いずれの場合も意味は同じで、浅い浸食谷の周囲に斜面樹林が接する集水域であり、丘陵地の中で一段低くなった谷あいの土地であることを表している。

なお、多摩・三浦丘陵における谷戸地形の成因は主に約2万年前の最終氷期頃にかけて進んだ雨水・湧水による浸食で、その後の縄文海進期にかけて崩落土などによる谷部への沖積が進んで谷あいの平坦面が形成されたと考えられている。

次回は(入りり、窪くぼ)について調べてみます。